

氏 名	古 浦(住 友) 修 子
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	甲文第159号 (文部科学省への報告番号甲第513号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2014年3月1日
学 位 論 文 題 目	遠藤周作文芸の成立と展開—根源と普遍への探究—
論文審査委員	(主査) 教 授 細 川 正 義 (副査) 教 授 大 橋 毅 彦 山 根 道 公 (ノートルダム清心女子大学教授)

論文内容の要旨

本論文ではまず、遠藤周作の作家的姿勢として、彼は日本という汎神論的風土において、西洋と東洋の精神風土の違いを認めたとうえで、そこに生きる人間の根源的問題を両者の共通項として掘り下げ、信仰の普遍性を明らかにするという、〈根源と普遍への探究〉への絶えざる挑戦であったと捉え、遠藤文芸の特色を、人間が神あるいは神的存在との出会いを果たしていくまでの過程において、作中人物の人生を凝視することを徹底し、人間の希求を浮かび上がらせることによって、神との垂直関係を描出した点にあると捉えている。その上で、本論文では、遠藤文芸の全体的構造を、人間の内部領域とそこに顕現する神との垂直すなわち縦軸の関係性と、実人生における愛や連帯の問題を通した横軸の関係性の交差からなるものとして定義し、〈根源と普遍への探究〉という立場から、永遠なるものへの志向に迫る視点を注目して論じている。また、遠藤文芸の展開を考えるうえで、その病床体験は、生の深淵で自身の人生を問い直しつつ神と向き合う要因にもなっていると考えられるとし本論文では、遠藤文芸における作品構造の展開の背景として注目しつつ全体を考察している。

論文は全体が序論、第一部、第二部、第三部、第四部、結論という構成で、第一部から第四部まで合計十三編の作品研究を収録している。

第一部は「初期遠藤文芸における〈西〉と〈東〉の距離感の認識」をテーマにして、『白い人』『黄色い人』『海と毒薬』を取り上げ、〈西〉と〈東〉の距離感の内実を、〈白〉と〈黄〉の対立構図から明らかにすることで、日本人の汎神論的心性において顕在化しがたい神や罪との対峙のありようを浮き彫りにすることを試みた初期遠藤文芸における作家の姿勢を究明している。これらの作品を通して、遠藤は作中人物の感覚や行為という人間の具体的営為を掘り下げ、絶対なるものを持ち得ない人間たちの内奥の葛藤を暗示的に描き出し、神への志向の可能性を問うている。

第二部は「弱さへの共感と〈同伴者イエス〉の創出」をテーマにして、『おバカさん』『わたしが・棄てた・女』『沈黙』を取り上げ、作中人物の人生を通して神、あるいはそれを暗示する存在が実感されていく過程を検証し、遠藤の抱くイエス像の作品世界における具現化、すなわち〈同伴者イエス〉の成立と内実についての考察を行なっている。病床体験を経て神への希求を一層強め、人間の孤独や悲しみにこそ顕現する神の愛を看取する認識を深めた遠藤は、作中人物が来し方を振り返ることによって、そこに働きかける超越的存在との真の出会いを果たしていく様相に迫り、人生の全体性への視点から神との関係性を明らかにしている。

第三部は「愛と連帯を視座とした現代的状況への挑戦」をテーマにして、『悲しみの歌』『女の一生 一部・

キクの場合』『女の一生 二部・サチ子の場合』を取り上げ、「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」（「ヨハネによる福音書」十五章十三節）の聖句が示す隣人愛の教えを軸に、地上の現実に根差した愛の行為と神の愛の相関を明らかにし、現代におけるキリスト教の可能性を追究している。他者への愛に自らを委ねる作中人物の生の姿勢は、地上の愛の究極の形であると同時に神の愛へと連なるものであり、そこに地上の現実を超克するものを見出し、人間を充たすものを提起しようとした遠藤の試みを評価している。

第四部は「老いと死の先にある永遠なるもの」をテーマにして、『スキャンダル』『深い河』を取り上げ、老いと死を契機とした魂の深層への下降が、神への志向につながるという経路を見出し、根源的問題の追究がすべての人間に内在する〈宗教性〉と超越的存在へのつながりの願望を形作っていく構図について考察している。作中人物の人生における出会いや痕跡を通して神との関係性を描いてきた遠藤文芸が、ここに至って「次の世界」すなわち死の側から人間を眼差し、死の向こうにある永遠なる存在に引き寄せられるように歩み、いつしか死を超える無限の愛を渴望していく人間像に、神とのつながりに心を向けていく共通した志向性を見出したのであると結論づけている。

以上の四部構成による各作品論を通して、本論文では、遠藤文芸は、神への深い信頼と、個々の人生に対する熱い共感とを縦軸と横軸との二つの軸の関係性を通して表現し、両軸の交わりによって構築される作品世界を通して、神と人間の関係性を問い続けたものと評価できるとし、宗教と文学を相関させ、そこに超越的存在を志向せずにはいられない人間と神との共鳴を証明しようとした遠藤の文学的営為は、存在の全体性への大きな眼差しによって成し遂げられたのであると結論づけている。

論文審査結果の要旨

本論文は、遠藤周作文芸とは、一貫して人間存在を凝視し、そのことによって神と人間の関係性を追究し、〈根源と普遍への探究〉の姿勢に基づいて宗教と文学のありようを問うたものであるという位置づけにおいて十三の作品論を配置して遠藤文芸の全体を考察したものである。具体的には、遠藤文芸は一貫して神への仰望と人間の深淵とのつながりを意味する縦軸と、人間の出会いと連帯を意味する横軸の交差する地点の中心に人間を見据え、その縦軸と横軸の相関に於いて生じる愛のありようや、自己を超えた存在への祈り、即ち神への志向性について考察を展開している。

その個々の考察としては、まず第一部に於いては、遠藤がフランス体験によって日本人としての自己と西洋のキリスト教との距離感を痛感したことから、その内実のありようを問い、信仰の可能性を問うた作品として『白い人』『黄色い人』『海と毒薬』を考察している。まず『白い人』では、「私」がなぜ「悪」の行為者となろうとしたか、なぜその体験を「記録」しようとしたのかを考察し、「私」の「悪」の行為と記録による実証が神を認め希求する「私」の心情から発することであると考察し、そこに人間と神とを結ぶ可能性が暗示されていると結論づけている。『黄色い人』では、〈白い人〉であるが背教神父となったデュランの「日記」を見た〈黄色い人〉である千葉が〈白い人〉であるブロウ神父にあてて「手紙」を書く作品構成から、デュランの罪意識に対して、その罪意識を持てず「疲れ」だけを実感する千葉の内実を問い、そこに神を実感できない〈黄色い人〉の姿を確認すると共に、その千葉がブロウ神父にあてて手紙を書く行為には、神と向き合えない自己の内面を自覚しつつも、神への問いかけを行ないつつあることが読み取れるとして、そこに神への志向性を指摘している。『海と毒薬』では、生体解剖実験に加わった勝呂と戸田が、世間の罰は感じるが罪を実感することが出来ないという苦悩を表白するその、それぞれの態度の中にこそ、罪意識の可能性があることを捉え、そこに絶対的な存在を希求する人間の姿を指摘している。以上の考察から、初期作品に於いての〈西〉と〈東〉の懸隔の中で、遠藤が日本人における宗教を求める姿勢とその可能性を明らかにさせている。論者の設定する縦軸に於いて、まさに神を希求せずにおれない人間像を明確にした点を評価できる

とともに、勝呂を「絶対者の前に佇む」姿として捉えているが、神の恩寵を描いた遠藤の神の視点にもう一步斬り込む可能性も残されているように感じられる。

第二部では、縦軸と横軸の交点における人間への遠藤の眼差しから「同伴者イエス」の成立を中心に考察している。まず『おバカさん』であるが、遠藤が私のイエス像であるとするガストン・ボナパルトは日本人の琴線にふれ得るイエスの愛を仮託された存在であり、そのガストンと出会った人間がガストンの存在をシラサギのように地上から飛翔していくものと捉えている点に注目し、そのガストンの存在がメタフィジックな世界と現実との架け橋となる〈伝達性〉を可能にしている点にこの作品の主題を見ている。『わたしが・棄てた・女』ではかつて安易に女を棄てた男が、その棄てた森田ミツを後に「聖女」であったと振り返るようになる道筋を考察し、そこに捉えられる男の根源的寂しさこそ男を神の前に佇立させる契機となったと論じている。ここでは、もう一步、ミツが死の直前まで男と出会ったことを忘れていなかったことが男に何らかの痕跡を残したことも神の前に佇立させた要因としてみる要素も残されていよう。『沈黙』では、主人公ロドリゴが厳しい迫害にあって自らの中に弱者を認識したときに、その弱者に注ぐ神の無限の愛を真に理解することとなったと論じている。それぞれ鋭い論証で神の前に佇立する真摯な人間像は明らかにされているが、更に「同伴者イエス」の側からの呼びかけと交差させることでその問いかけは一層迫真性を持つことが出来るであろう。

第三部は、「同伴者イエス」像に表象される愛について、遠藤が用いた「ヨハネによる福音書」十五章十三節「人、その友のために命をすてる。これよりも大いなる愛はなし。」の聖句と対比させながら、現代におけるキリスト教の可能性を考察している。まず『悲しみの歌』であるが、ストーリーは『海と毒薬』の続編の装いをしているが、勝呂に寄り添うガストンを登場させることで作品は『海と毒薬』とは異なった、空虚にあえぐ人間を、真の愛へ導く可能性を提示した作品であると論じている。『女の一生 一部・キクの場合』においては、愛する男のために身を汚して死んだキクの一生が「ヨハネによる福音書」の愛の実践であり、かつ、彼女の人生に触れた伊藤の改心を通して、キクが存在は神の愛に倣う行為ともなっており、そこに神と人間の関係性の可能性が提示されているとまとめている。また『女の一生 二部・サチ子の場合』は、戦時下のサチ子と修平の愛とコルベ神父の行為を絡ませている作品が、戦争という時代の閉塞と死を前にした極限状況において、それ故により明確に愛と連帯のテーマ、即ち「友のために死す。これよりも大いなる愛はなし。」を鮮明に描いていると捉えている。論としてはキクの愛を「究極的な地上の愛」、あるいはサチ子を神の愛につながろうとしている、という人間の側からの神の愛への仰望を中心にしているが、ヨハネによる福音書の箇所が「これを行えばあなたがたは私の友である」につながっていることをふまえ、遠藤はもっと強く神のまなざしを作品に顕現させようとしたということも加えることができよう。

第四部は、老いと死の自覚から永遠なるものを志向する〈宗教性〉を視点に遠藤文芸の到達点を考察している。具体的にはまず『スキャンダル』であるが、人は老いと死を自覚することでその恐怖から醜悪世界への直面を余儀なくさせられる。その誘いが死という無明の世界への超克の願望であり、それが生死を超えた神の世界への仰望につながっていくと考察している。次に、本論のメインでもある『深い河』について三本の論文を掲載している。まず最初の論は作品の舞台となったガンジス河に注目し、河が六章の「河のほとりの町」と九章の「河」とに明確に区別して描かれており、「河のほとり」は「生と死にまつわるすべてのものが集合する場」であり、悠久の流れをたたえた「河」は「個々の魂のドラマが開示される場」、すべての生命を包みこみ永遠なるものに導いていく場として描かれていると結論づけている。『深い河』の二本目では、「母なるもの」を求める美津子の内面の空虚感に注目して、その空虚感を埋めるために大津をたずねて旅をしてきた美津子が、ガンジス河に象徴される超越的な働きとしての〈母なるもの〉を実感しつつ、最後は大津の信仰を通して彼女も「神」の愛に導かれていく物語であるとまとめている。三本目はそうした登場人物たちがそれぞれの経緯をたどりながら「河」へ誘われていく物語において、彼等を促しているのは絶対的な〈つ

ながり)、即ち永遠なる神へのつながりの希求であると結論づけている。そのように、『スキャンダル』から『深い河』への流れは、魂の彷徨が、その苦しみの中で、限りない大きさに包み込む永遠なるものに抱かれたいという願いを持つようになる過程を描くことで、神との関係性の端緒を描いているという視点でまとめており、絶対なる神との関係性の可能性を描く地点に到達したところに遠藤文芸の意義があると結論づけている点に遠藤文芸の宗教性と文芸性をトータルな視点で研究した論として評価できる。

本論は神と人間のつながりを示した縦軸と人間の出会いと連帯を示した横軸を設定して、宗教と人間がいかなる対立と葛藤をもたらしながら、神との関係性の可能性を明確にさせるようになったかを十三の作品論を展開させて丹念に検証している。縦軸の志向する神の側からの登場人物への眼差し、縦軸と横軸の交点に佇立する人間像に対する更なる問いかけがあれば、最後の『深い河』論で問うた〈宗教性〉という遠藤文芸の核心をさらに鮮明にすることができたであろう。遠藤文芸に深く共感する論者であるが故に時には思いが先行する表現が論証を甘くさせる箇所があったことも今後の課題であるが、本論では、従来の遠藤文芸研究では重視されてこなかった中間小説と区分されている『おバカさん』をはじめとする作品にも積極的に取り組み、遠藤文芸の全体から彼の文芸と宗教性を明らかにしようとした研究には本論のオリジナリティを高く評価できかつ、今後の研究への期待も大きい。

2014年2月18日に公開発表会を行いその後、主査副査の3名で、口頭試問を行ったが、住友氏の論文が博士学位（文学）を授与するに値するものと評価したので、ここに報告する。